

F-41 過疎地における老人の生活過程の— 鹿児島県離島における事例—
鹿児島女子短大 松浦 勲

目的 昭和30年代から特に激しくなった地域移動、主として都市への人口流出は、一方では過密、地方で過疎を生じせしめた。その過疎地での家族、特に残された老人家族について言及されたものは少ない。ここには、過疎地であり、離島性という宿命とも、地上地における老人家族の生活過程を研究するものがあるが、この報告は、主として、世帯構成と、生活収入源等についておこなう。

方法 調査地：鹿児島県大島郡瀬戸内町諸鈍部湾（加計呂麻島）。調査時期：昭和49年8月、昭和50年7月、2回の調査。調査対象：65才以上の老人。調査方法：面接調査。

結果 この地域は、人口の27.9%が65才以上の老人により、占められているが、彼らの世帯構成の特徴は、年令によって変化がみられる。65才～79才までは、有配偶者の場合、老人夫婦の世帯、配偶者死亡の場合は、独居世帯となり、独居世帯の多くは、女性である。男性は、独居世帯は少なく、同居（子ども夫婦）の傾向がみられる。生活収入源の特徴は、69才～74才までは、男性、女性ともに、自らが稼働している（この地域の主要産業は農業と大島紬であり、女性の多くは、大島紬織工従事者である）。それ以上の年令になると、女性の場合、子どもからの援助が多くなるが、男性の場合、子どもからの援助は少なく、むしろ、年金、生活保護が多い。